

関係機関長 殿

沖縄県病害虫防除技術センター所長
(公 印 省 略)

病害虫発生予察特殊報について

平成 30 年度病害虫発生予察特殊報第 5 号を発表したので送付します。

平成 30 年度病害虫発生予察特殊報第 5 号

1 病 害 名 : マンゴー南根腐病(仮称)

2 病 原 菌 : *Phellinus noxius* (シマサルノコシカケ)

3 発 生 地 域 : 石垣市、宮古島市

4 発 生 作 物 : マンゴー

5 発生確認及び発生状況

- (1) 平成 29 年 5 月、石垣市のマンゴー施設において、葉の退色や落葉、枝枯れなどの萎凋症状が確認された。罹病樹の地際部や根部には黒褐色の菌糸膜が見られ、沖縄県農業研究センター及び国立研究開発法人森林総合研究所に分離・同定を依頼した結果、*Phellinus noxius* によるマンゴー南根腐病(仮称)と診断された。応急的な処置として、平成 29 年 6 月に当該樹と周囲の土を伐根・除去し、まん延防止を図った。
- (2) 平成 30 年 1 月、宮古島市の施設においてマンゴーの全身枯死症状が確認され、地際部から同菌が検出された。
- (3) 本種は熱帯・亜熱帯に広く分布し、樹木を中心に 200 種以上の植物に感染する。国内では 1988 年に石垣島で初確認後、南西諸島(沖縄県、鹿児島県)と小笠原諸島のモクマオウ、イヌマキ、テリハボク、フクギ、デイゴ、ソウシジュ、ハイビスカスなどで被害が見られている。マンゴーでは、平成 25 年に小笠原諸島の露地マンゴーで発生が初確認された。

6 病徴

罹病樹では、初め葉の退色や樹勢低下が見られ、やがて枝枯れや幹枯れを起こす。地際部や根部では、茶褐色～黒褐色の菌糸膜に覆われる(図1)。樹皮を剥ぐと、木質部の表面が蜂の巣様の症状となる(図2)。病徴が進展すると、地上部では顕著な落葉がみられ、全体が枯れあがり、最終的に枯死に至る(図3)。

7 病原菌の特徴と伝搬方法

病原菌は、*Phellinus noxius*(硬質キノコの1種シマサルノコシカケ)であり、培地上での形態は鹿角状菌糸や分節胞子を形成する特徴を持つ(図4)。罹病樹の根や土壌中に残存する罹病樹の根などの残さとの接触により周辺の健全木に次々に感染するため、防風林や防潮林、街路樹などが集団枯死する事例も多い。また、担子胞子の飛散による伝搬も起こっている可能性が高いと考えられている。本菌は宿主となる樹木が枯死した後も、根株や土壌中に残存する根などで 10 年以上生存するとされる。

8 防除対策

- (1) 現時点では罹病樹に有効な防除農薬等はなく、木が枯れても病原菌は土壌中の根の残さなどで 10 年以上生存するため、罹病樹は早急に抜き取り、細根まで完全に掘り起こし、周辺の土ごと入れ替える必要がある。
- (2) 応急的な措置として、汚染されていない土で埋め戻した後、罹病樹が存在した場所と健全樹の境に鉄板などを埋め込み、根部の接触を遮断する。
- (3) 多くの樹木に感染し、病原菌の残さなどで長期間残存することから、防風林等の樹木が枯れた場所にマンゴー施設を設置しない。



図1. 樹幹地際部に形成された菌糸膜



図2. 蜂の巣症状を呈した木質部の腐朽



図3. 枯死した地上部



図4. 鹿角状菌糸

★詳しくは沖縄県病害虫防除技術センターにお問い合わせ下さい★
TEL : (本所)098-886-3880、(宮古駐在)0980-73-2634、(八重山駐在)0980-82-4933
ホームページアドレス: <http://www.pref.okinawa.jp/site/norin/byogaichuboj/index.html>